



ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)

される「第九(交響曲第九番合唱付き)」など数々の名曲を残したクラシック音楽界の巨星です。中には「樂聖 ベートーベン」として覚えていらっしゃる方もおいでになる事でしょう。そのベートーベンが生まれて今年で2550年になるということで2020年はベートーベンの曲があちらこちらで鳴り響くことになります。

ベートーベンは30歳ごろから耳の聞こえが悪くなり31歳の時弟宛に遺書まで書いています。確かに音楽家にとって耳の聞こえは最大の生命線ですよね。その悲劇を乗り越えて歴史に残る名曲の数々を書いたことから「樂聖」と呼ばれているわけです。

私の手元に「死因を辿る」大作曲家たちの精神病理のルテイ「大作曲家の死因を探

る」という本があります。別に画家でも小説家でも政治家でもいいと思うんですがどうして作曲家に特化した本なのかと云うことはさておきこうした本からベートーベンの興味深い事実が語られています。まずベートーベンの耳疾の原因が「先天性梅毒」であることが書かれています。ちょっと意外ですね。これはベートーベンが26歳の時の手紙に「水銀軟膏」?を1日3回体に塗つたということが書かれていたことから、当時梅毒疾患の治療薬に使われていた水銀軟膏が処方されたのではないかと推察されました。また彼は慢性の下痢にも悩まされていました。これが精神的なストレスによる過敏性大腸炎を悪化させたことが原因ではないかと推測されています。崇高な音楽を生み出していた本人は肉体的にはかなり悩みが多かったということが言えます。

ベートーベンの弟子が書いた



## 川ちゃんの心の寄り道

フリーアナウンサー 川口 浩一



私は2020年で  
69歳です

人は誰でも何らかの病気になるのではないでしようか。医者にかかったことがないという人でも鼻かぜをひいたり、腰痛を抱えていたり、痔であったり、歯槽膿漏であったりと何らかの障りを持っているのではないかと思います。だからこそ健康番組が毎日のように放送されたり健康情報誌が書店のメインコーナーに並べられたりしているんだと思います。

私もかつてはすこぶる健康オタクでした。若い頃は献血に熱心であったり、40を超えてからは人間ドックを受けるなど健康チェックには気合を入れていたのです。が…。

2017年、65歳で定年退職した半年後の6月、痛みなどはありませんでしたが右頸下に腫れを確認。すぐに耳鼻咽喉科を受診し検査を受けた結果「がん」であることが発覚しました。以後9月末に手術を、11月から翌2018年1月半ばまで放射線と抗がん剤の追加

治療入院と闘病生活を送りました。ところがその後の定期健診で今度は反対側の左頸下部のリンパ節に不審点ありとの報告を医師から告げられたのです。そもそも私のがんの正体は「原発不明がん」。胃でも肺でも大腸でもなく原発巣が不明で転移だけが見つかるという厄介なものです。幸い二回目の手術で切除した部分の細胞診は陰性でした。まあ結果として予防切除ということになつたわけです。以後今に至るまで歳相応の比較的元気な生活を送っています。

現在は局アナ時代から担当している「いきいき健やかTV」「旅々スマゼン」(いずれも青森テレビ)を中心にして仕事をさせて頂いていますが最近は「がんサバイバー」としての仕事も幾つか依頼されるようになりました。とはいえるイヤ後時間がないわけではありません。そうした時間を最近は読書に費やすことも多くなってきました。仕事

柄とはいえ四十年になんなんとするアナウンサー人生で集めた本が我が家の中棚に並んでいます。小説、エッセイは勿論趣味の音楽の本、食に関するもの、言葉(言語)に関するもの、美術に関するものなど種々雑多な本たちです。

中でも特に多いのが音楽関係の本です。700冊は優に超えていると思います。

中学生の頃からクラシック音楽を聞きはじめ以来半世紀以上親しんできました。またLPレコードやカセットテープ、MD、CDなどがどのくらいあるのかもはや見当がつかないほどです。

ところで「ベートーベン(1770-1827)」という名前皆さんご存じですよね。小中学校の音楽室にひと際いかめしくもじやもじや頭でこちらを睨みつける肖像画を思い出す人もいらっしゃるでしょう。

「エリーゼのために」「月光ソナタ」「交響曲第5番『運命』」そして暮れに日本全国で演奏